「アジア」というイメージ
－現代大学生の持つ多元的理解－

見城悌治

はじめに

21世紀を迎え、日本社会が一層の「国際化」を図らなければならない事は、強迫観念を伴いつつの「常識」と化している。たとえば、それは英語教育強化の議論が、低年齢層も巻き込む形で行われつつある点に「国際化」=「英米化」との認識の典型が看取できよう。またその一方で、明治維新以来の「脱亜入欧」志向から、アジア志向（「入亜」）へとシフトを移すべき必要性が説かれているのも、また今日的言説の一つの特色であると評することができよう。

大学という場における「国際化」の試みは、留学生の受け入れ、短期交換留学プログラムの実施、授業の改善の努力、教員間の研究交流促進など、様々な方法によって、その実現が目指されている。千葉大学でも、授業改善の一環として、2000年度から留学生限定科目であった「日本事情」を「国際交流科目」という新しい枠組みに編成し直し、日本人学生も受講出来るようにした。その結果、留学生・日本人学生双方が、共通の素材をめぐる討論などを通じて、相互認識を深める場が徐々に創出され始めている(1)。

さて、日本で学ぶ留学生の総数は、2003年５月現在で約11万余にまでなったが、その93％はアジア地域からの留学生が占める事は周知の通りである。しかるに、この圧倒的なマジョリティー＝「アジア」に対して、日本人学生は、どのようなイメージを抱いているのだろうか。文化を異にする人と接する際に、誤った情報による偏見が、両者を分かつ場合が少なくない。日本人学生の「アジア」イメージを把握しておく事は、日本人学生と留学生を円滑に交流せしめるための資料として、また留学生が日本社会に適応する際の指導資料として、きわめて重要になると考える。

ところで、「アジア」をめぐる著作や講座物の出版は、社会的要請もあってか、近年相当な数に上っている。ごく最近では、2002年から翌年にかけて岩波書店が『アジア新世紀』と題する全８巻のシリーズを発刊した事が記憶に新しい。この講座は「刊行にあたって」と題する序言でこう述べている。西欧の視線によって生成した「アジア」

概念は今日において、単純な二項対立で捉えられなくなってきた。「こうした時代にあってアジア的世界観と価値観のありかを再検証することは、われわれにとってきわめて緊急の課題であるように思われます。21世紀にアジアという認識はどう可能なのか。アジアの各地域はどのような原理・価値に基づき社会を構想し、それは世界全体の進む方向とどのような関わりをもつのか」との問題提起をするのである。

この講座が最終的に課題を達成しているか否かの議論はここでは措くが、この序言で、アジアの多元性を想定しつつも、「アジア的価値観」の如き曖昧な概念でまとめようとしている点には、問題を感じる。ましてや世間では西欧に対する日本の優位性を「アジア」概念によって称揚しようとする動向も少なくないのである。

こうした問題へ切りこむ視座については、サイード『オリエンタリズム』（1978年、邦訳　1986年）が圧倒的な影響を与えてきた事は周知の通りであり、近年では、思想史家・子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか……近代日本のオリエンタリズム』（2003年、藤原書店）が、近代日本のアジア観生成過程を検証し批判する成果を挙げている。筆者も、我々が有している「アジア」イメージの来歴を、思想史的に考察する手法はきわめて有効であると考えている。

本稿は、こうした課題に直接応えるものではないが、この問題意識を根底に置きながら、現代大学生の「アジア」イメージについて、アンケート回答を用いた考察を試みていく。この作業が、日本人学生と留学生の交流・相互認識の基礎資料になるとともに、現代大学生の歴史認識、国際認識の一端を窺い知ることにもつながれば幸いである。

1．アンケートの概要 —— 質問項目、対象者など

筆者は、千葉大学において、全学部生を対象とする総合科目（複数の教員が担当するオムニバス科目）「近代日本のアジア観」を2000年度から開講している[(2)]。その第1回目講義の冒頭で、毎回アンケート（A4版1枚）を行ない、現代の大学生が「アジア」についてどのようなイメージを有しているのかを調査している。アンケートの第1問は、「『アジア』という言葉から何を連想しますか。自由に書いて下さい」。第2問は、「日本は『アジア』だと思いますか」と尋ね、「はい　いいえ」のいずれかを選択させるとともに「その理由」の記述を求めた。その他には第3問として、「日本史」「世界史」を履修したか否かの質問をするだけで、最後に「この講義に期待するところ、学ぼうとするところを自由に書いてください」という項目を設けるだけのシンプルなものである。

このアンケートは完全な自由記述で行っており、選択肢は用意していない。また複数回答も妨げていないため、固有名詞から抽象的な説明まできわめて多岐に渉る表現が、回答用紙上に現れる（一人で十個余りのイメージを列ねるものもいた）。したがって、本稿を作成するにあたり、その分類方法をどうすべきかにまず腐心する仕儀に至るのだが、第１問については、筆者がカテゴリー分け可能と考えた項目を15個設定し、その中にすべての回答を組み込む形をとった。また、一人で複数答えた場合も、それぞれの分類項目へすべて組み込むこととした。そのため、各項目の数値を合計した全体数は、回答者数を大きく上回る結果となった。さらに、第２問では、「はい」「いいえ」の二者択一を良しとせず、敢て「どちらとも言えない」と記した学生がいたため、結果として第三番目の分類項目も立てた。またそれぞれを選んだ理由についても、一人で複数を記述している場合には、第１問同様、各々を一回答と数えた。またパーセントの算出にあたっては、回答数を受講生数で割る方法を取ったため、総計は必然的に100％を超える事になるが、あるイメージを受講生全体の何割が有しているかを知るためにこうした処理法を取った。

さて、本稿で使用するのは、2001年度および2003年度に実施した「アジア」イメージについてのアンケート結果である。2001年度（以下、01）分を中心に論じていくが、それは334名という多くの回答を得ることができたことが最大かつ唯一の理由である。学年別では、１年生198名（59.2％）、２年生76名（22.8％）、３年生35名（10.5％）、４年生以上25名（7.5％）に分かれ、男女比は201名（60.2％）対133名（39.8％）であった。対比すべきデータとして、2003年度（以下、03）分を最新のものとして用いるが回答者が136名と大幅に減ったため、本論での分析コメントは、データの多い01を中心に論じることになる[3]。ただ、現代大学生の思考傾向の変化を読み取れそうな箇所については、適宜比較をする場面もある。母数に差がある事を前提に敢えてする議論であることを、初めに了解いただきたく思う。

２．大学生にとっての「アジア」イメージ

「『アジア』という言葉から何を連想しますか。自由に書いて下さい」というアンケートに対するきわめて多様な回答を処理分類するため、筆者は以下の項目を設定した（本稿末尾【資料１】参照）。①（特定の）地域名・国名、②民族的・身体的特徴、③風土・産物など、④歴史・文化・宗教、⑤非西洋的価値観、⑥現実的政治・国際関係、⑦植民

地・戦争、⑧経済的退歩、⑨経済的発展、⑩日本との経済的関係性、⑪日本との政治的社会的関係性、⑫日本との文化的歴史的関係性、⑬親近感、⑭距離感・偏見、⑮人名など、である。客観的中立的項目と筆者の主観的意図的項目が併存している点に特色があるが、若干の補足説明をしておく。まず「歴史・文化・宗教」項は、主として固有名詞だけを入れている。一方「西洋とは異なる文化／精神」を強調している抽象度の高い（あるいは曖昧な）言葉に関しては、「非西洋的価値観」という項目を作り、そちらに納める事とした。また、「現実的政治・国際関係」項には、現代史・現代国際社会に関する用語を入れたが、「植民地・戦争」関係は別項目を立てる事とし、そこからは抜いた。本来は上位概念である「現実的政治・国際関係」に含ませても良いだろうが、回答の多さから、敢えて別立てとした（「植民地・戦争」項内の小区分において、主語を「日本」と明記していないものは、さらに別枠にしている）。次に「経済」関係の回答は、思いきって「退歩」と「発展」の二項対立にしてみた（ちなみに「物価が安い」を「退歩」項に入れたのは、消去法である）。さらに、「日本」という主語を明記した上で、アジアとの関係性を説く回答も少なくなかったため、それらは「経済」・「政治社会」・「文化歴史」の三分類に各々填め込んでみた。これらの回答のいくつかは「経済発展／退歩」項、「植民地」項、「民族的特徴」項などと重なるものもあるが、敢えて区別をつけた。最後に置いた「親近感」項、「距離感」項も他分類との境目が曖昧な回答を一部含んでいるが、これもまた対称として並べる事を主眼とした。

以下では、この15項目に分けた01の特色を紹介し、コメントを加えていく。まず01の回答比率が高かった上位５項目を紹介しておこう。１位は「経済的退歩」（45.8%）、第２位が「地域名・国名」（40.4%）、「経済的発展」（40.1%）、それに、「非西洋的価値観」（24.9%）、「植民地・戦争」（23.4%）の順番であった。ちなみに、母数が少ない03の回答比率はどうか。こちらの１位は「風土・産物」（64.7%）が図抜けており、以下「民族的・身体的特徴」（36.8%）、「経済的退歩」（35.3%）、「地域名・国名」（25.7%）、「非西洋的価値観」（21.3%）と続いた。「経済的発展」は03の回答では13.2%に激減し、「植民地・戦争」も8ポイント数値を下げ、15.4%になった。この変化をもたらしたものは、社会意識の反映なのか、はたまた母集団の回答者の個性に属するものか、ただちに断定することはできない面が多い。よって、先にも触れたように、データの多い01を中心に据え、03は補足的に扱う所以である。

①（特定の）地域名・国名

40％の回答を獲得しており、小項目では「中国」13.2％、「東南アジア」 7.5％の回答が目立った。それに対し、「西アジア」「中東」の回答はごく少数にとどまった。03では、「中国」が5.9％へ下がったが、「東南アジア」の下げ幅は、5.0％と比較的小さかった。以降の回答も踏まえ、やや早急に述べれば、親和的存在としての「中国」のイメージが、「東アジア」あるいは「韓国・朝鮮」を覆い尽し、その一方で「異」なる存在として「東南アジア」が比較的強く意識されているように思える。また2002年には、ワールドカップの共同開催という一大イベントがあったにも関わらず、韓国イメージが薄くみえるのは、日本のアジア観の一端を確実に反映していると考えるが、いかがであろうか。

②民族的・身体的特徴

自らの姿と重ねてか、黄色い肌や黒い髪と答えた比率は、13％余であった。一方「多民族」との答えも10名（3％）いた。しかし、01において②へ区分けされた回答率は、全15項目中９位（17.1％）と高くはない順番にとどまった。しかるに03では、36.8％で第２位を占めた（黄色の肌、黒い髪の合計は、28％にも上る）。また、母数が少ない割には身体的特質の回答が多様であった。「モンゴロイド」の肉体的表象と「アジア」イメージを重ねる発想は相当根強いように思える。

③風土・産物など

第６位にあたる23％を占めた本項目は、地理の教科書に出てきそうな幅広く雑多な単語を填め込んで創ったため、「広大」「米」「美味しい料理」（各々４％）などを先頭に多様なイメージが並んだ。この間口の広さが幸いしてか、03では、64.7％をも占めるダントツのトップ項目となっている。「広大」「米」が各々10％前後を獲得して、上位にあるのは01と同様であるが、一方で「熱帯」「ジャングル」「スコール」の「東南アジア」イメージが、こうした表現形態を取って溢れて出ている点は注目される。

④歴史・文化・宗教

第８位（21.0％）であったが、その中では「伝統・歴史性」が8.4％を、「仏教」が3.9％を占めている。03は、全体比率こそ15.4％と減ったが、順位自体は７位とあまり変わらない。ただし、「伝統・歴史性」「仏教」ともに2.2％にとどまっている。また「漢字」、「儒教」と答えた総人数も、01が３名、03は２名に過ぎなかった。身体的特徴（②）から「アジア」の共通性を看取する答が多かったにも関わらず、中国文化圏的な

共通性はほとんど意識されていないようだ。「中華思想」という答もごく僅かあったが、中国文化との関係性を無意識の内に、あるいは自覚的に隠蔽し、切り離そうとする心理も見え隠れしているかに思える。

⑤非西洋的価値観

24.9%で、第4位にランクされた（03も、21.3%で第5位）。「多元性」「精神性」「エスニック」などで、「オリエンタリズム」と看做される回答の多くはここに入れた。「新しい価値観の発信地」の如きプラスイメージから、「乱雑」の如きマイナスイメージまでが、混在している。「西洋」評価と表裏に捉えられているが故の「多様性」でもある。

⑥現実的政治・国際関係

この項は、第7位（22.5%）にとどまった。しかし、便宜上別項立てとした「植民地・戦争」の比率を加えると、45.9%となり、1位に躍り出る事は強調しておきたい。この項目では、「人口爆発」の12.6%、「民族紛争」の4.2%がトップ2となり、それ以外も「政治的不安定」と連動するような単語が多く並んだ。03の比率も、01とほぼ同様であったが、「北朝鮮拉致問題」「SARS」など、02年後半から社会的話題を呼んだ事象が少数ではあるが、挙げられてきた点も記しておきたい。

⑦植民地・戦争

⑥と切り離した単独の集計をすると、23.4%で第5位となる。筆者の予想よりも少なかった。しかも、03では回答率が15.4%（第7位）へとさらに下がってきている。もう少し細かに見ると、日本による「侵略」あるいは「戦後処理問題」と答えた率が、9.9%から2.2%へと大幅に減ったこと、その一方で主体を明記せずに、ただ「植民地」「抑圧され続けた地域」などとした率が8.9%から10.3%へと微増していることに気付く。ここから「日本とアジアを『植民地』や『戦争』と重ねた主体的イメージを持つことのできる意識が急速に失われつつある」云々と拙速な結論を導くつもりはないが、戦争体験者が次々物故していく時代性を鑑みるとやはり気になるところではある。

⑧経済的退歩

仮に「戦争」関係が今日の大学生たちの記憶に止めるに値しない受験知識的「過去」だとすれば、経済関係は様々な意味で、生々しい「現在」である。敢えて「経済的退歩」と名付けた本項は、45.8%を占め、01における最高得票項目となった。03でも、10ポイント下げたとは言え、35.3%で第3位の回答率を占めた。

なお、本項の小項目においては「発展途上国」という回答と「経済的遅れ」という回答を同じ分類にしている。前者については、「遅れ」の意味とは逆の「将来性豊か」というニュアンスを込めた学生がいた可能性を否定するものではない。しかし、かつて「後進国」という呼称が侮蔑的と取られるのを避ける政治的配慮から「発展途上国」という言葉が用いられた経緯も鑑み、一律に否定的ニュアンスへ分類したことを付言しておく。

⑨経済的発展

⑧の対概念として、設けた項目である。40%余という大きな割合を占め、その中でも「進歩発展がめざましい」と明記した者が18.6 %、「21世紀の世界で重要な位置を占める」との予言も6%を数える事ができた。ところが、である。03においては、小項目での回答率がことごとくマイナスとなり、全体の比率も13.2%と急降下した。01には多く見えた「NIES」、「活力」などの言葉がほぼ姿を消してしまったのは、何故だろうか。「アジア経済危機」の幻像か、はたまた日本国内の不況のあまりの深刻さに、「アジア」に対し、余裕をもったエールを送る暇が無くなったためか。

01では、「退歩」と「発展」のイメージがほぼ1対1だったのに、03の結果では、3対1へと大きく変容する。母数の少なさも変動の要因になっている可能性はあるが、この理由・背景の分析は、別のデータも交えた上で慎重に為されなければならないと考える。

⑩日本との経済的関係性

⑨で見た03における大学生たちのアジアへの経済的関心の低下が直接に顔を見せてくれる項目となった。つまり、01では「傲慢露骨」であれ、「共存共栄」志向であれ、日本経済と切り離すことのできない地域という認識が少数ながら明確に看取できたのに対し、03はほぼ全滅と化している。

⑪日本との政治的社会的関係性

01の回答には、そのスタンスに微妙な相違もあるが、⑨と同様に日本との相互関係性において、アジアを捉えようとする姿勢が強く見えた。しかし、03ではそうしたイメージが霧散してしまったのは、何故なのだろう。単に母数の少なさに還元して良いものだろうか。

⑫日本との文化的歴史的関係性

「同民族」という回答は、②の「民族的・身体的特徴」項の中に振り分けたが、本項

目は、日本との同質性・関係性を強調した回答を少数ではあるが入れてみた。ここでは、01と03との間に大きな違いは見られなかった。

⑬親近感

⑫までの項目立てとは、やや性格を異にし、また他項目との境界が曖昧なところもあるが、次項の「距離感・偏見」と対にして示したかったが故に、設けたのがこの分類である。回答率は、01、03ともに８％弱にとどまる。サッカーやサブカルチャーなどの答は、予想外に少なかった。大学生の趣味嗜好から言えば、そちら方面の回答が多くても不思議でないが、「アジア」イメージで反射的に浮かぶ存在には昇華していないようである。なお、「日本との深い関係性」という主旨の記述が８名いたが、経済・政治・文化（⑩～⑫）のいずれとも判別がつかなかったため、ここに置いた。

⑭距離感・偏見

01が10.5％、03が14.0％であり、予想外に低い数値ではないか、と安堵したい気持もある。しかし、01については、セレクションをするため、名前を書かせており（注３参照)、その影響も多少想定される。そもそも、直截的なマイナス表現を用いなくとも、⑥「現実的政治」項や⑧「経済的退歩」項の回答率から、その傾向の残滓はしばし垣間見えるであろう。

⑮人名など

人名や著名な「アジア論」を挙げた回答はごく少数である。戦場カメラマン名など、回答者の好みが強く反映したものがほとんどであった。

３．大学生にとって、「日本は『アジア』か否か」

このアンケートで問うた第２問「日本は『アジア』だと思いますか？」の回答とそれぞれの比率、理由分類は以下の通りである。

①はい

01では、80.2％の回答を得た。また03では、さらに多い88.9％の人がこれを選んでいた。それでは、その理由をどう説明づけていたのか。多数意見については、「歴史的文化的理由」、「地域的地理的理由」、「身体的理由」の大項目を設け、各自が記述した文言に応じて、各項に振り分けた。その結果、01が挙げた理由のベスト３は、「歴史文化」40.4％、「地域」30.8％、「身体」18.9％の順であった。これに対し、03はトップが「地域」で40.0％、次いで「歴史文化」30.9、「身体」16.9％となった。１位と２位が逆で

あるものの、比率はほぼ同じになった。

この三大分類の枠からはみだす特色ある回答として、01からは「自由観念の発達の遅れ」、「政治的立場の弱さ」、「『アジア』でありたいから」の３つを挙げておこう。前二者はともすれば、欧米と一体化したかの錯角から、「アジア」諸国に強圧的な態度で臨みがちな日本を、自省する立場と考えたい。しかも、単なる「自虐」ではなく、共に改善発展していこうという積極的意志も込められているように思う。「『アジア』でありたいから」と答えた人の「アジア」イメージの内実は不明なものの、ここにも連帯志向を読み取ることは可能であろう。

03の少数意見の特徴は、敢えて「消極性」の語で括りたい。01にも登場する「授業でそう習った」という優等生的でそのじつ没主体的な回答の比率が03では上昇するとともに、「分からないがそう信じてきた」、「特に反対する理由がない」等、同類の回答が少なくなかった。「アジア大会に出るから」という01には見えなかった記述もその一環を為す事例に入れても良いかもしれない。01で第一位であった「歴史文化」が、03では「地域」にその地位を奪われた理由を推測すれば、積極的能動的理由付けよりも、消極的受動的理由付けが勢力を増して来ているのではないか、という可能性も提示しておきたい。

②いいえ

01では、17.4%がこれを選んだのに対し、03は、10.3%とかなり減った。その理由は明白で、「欧米化している」「経済格差が大きい」の回答率が、10.5%から4.4%へと半減した事が大きい。日本経済の停滞が学生の有するイメージの変貌に直結しているのであろう。また01では「戦後処理の不徹底が不信感をよんでいるため」「アジアの人々からは、アジアの仲間として認められていないから」等の回答も存在したのに対し、03にはこのような事柄を「問題」として自覚し、解決の糸口を探ろうとするような理由付けはほとんど見られなかった。①の回答と併せ考えるに、03ではやはり「消極的態度」が増加しているという仮説の的はそれほど外れていないのではないか（記名の有無も無視できない条件の相違であるが）。

③どちらとも言えない

最初にも触れたが、この項目は本来設置しておらず、その意味では「主体的」な回答者と評せるが、ごく少数にとどまった。「はい」の理由説明中に、「アジアだと思うが、欧米に近い」と記したものが、01で14.4%存在している事などを勘案すると、第三番

目の正式な選択肢とした場合、ここを選ぶ回答が相当数でるのではないかと想像される。

4．考察 —— 他の調査結果との対照において

大学の教養科目である「近代日本のアジア観」の開講時に取ったアンケート結果から、現代大学生（千葉大学生）の「アジア」イメージの特色を見てきた。01年度と03年度のデータを用いた訳だが、母数の異なり・記名の有無などから単純な比較は難しい側面もあるものの、おおよその傾向と特質は看取できたと思う。

その特質を可能な限り一般化するため、類似する調査データを以下に挙げ、本論との比較を行いたい（大学生を対象とした同種のアンケート調査は管見の限りでは探す事ができなかった）。

1）1984年。全国の高校２年生3829名を対象。「アジア」のイメージを一つだけ自由に答えさせる[4]。

貧困・飢餓（18.6%）、発展途上・遅れ（16.3%）、広大・大陸（8.6%）、難民（6.5%）、黄色人種（5.6%）、暗い（3.2%）、米・農業（3.1%）、過密人口（2.2%）、中国（1.6%）。

2）1994年。全国の有権者2316名を対象。６つの回答カードから「今のアジアをあらわすのにふさわしいと思う言葉」を一つだけ選ばせる[5]。

不安定（33%）、躍進（24%）、貧困（17%）、安定（８%）、停滞（７%）、豊か（４%）。

3）1996年。全国の有権者2307名を対象。６つの回答カードから「今のアジアをあらわすのにふさわしいと思う言葉」を一つだけ選ばせる[6]。

不安定（32%）、躍進（30%）、貧困（17%）、安定（7%）、停滞（6%）、豊か（３%）。

4）1999年。全国の有権者2097名を対象。８つの回答カードから「アジアを表すのにふさわしいと思う言葉」を一つだけ選ばせる[7]。

貧困・停滞（29%）、家族重視（15%）、自然との共生（15%）、協調・調和（11%）、精神的な豊かさ（6%）、権威主義（5%）、縁故社会（5%）、活力（4%）。

これらを見ると、「貧困」「不安定」「停滞」というマイナスイメージが、すべてにおいて前面に出ていることは、明白である。また、94年から96年にかけ、「躍進」が回答

数を伸ばしてきたと思いきや、99年では項目設定が変わったこともあるが、「活力」を選んだ人は、最も少数派になった。しかし一方で、「家族重視」「自然との共生」など「精神」性に関連する術語が相対的に浮上していることには注目したい。

さて、本論の結果とこれらを直接切り結ぶことは、難しい面もあるが、多少勘案しつつ、本論を総括すると、以下のような「まとめ」になろうか。

まず、日本は「アジア」という非欧米地域に位置しながら、唯一「近代化」=「欧米化」を果した特殊な国である、というイメージはほぼ確定している。そして、両者の特色を併せ持つところが、ある場面では強みであると理解されるが、逆風下では、その蝙蝠的鵺的態度が弱みに転ずる過程を歴史上で繰り返してきた事を、その回答の多元性が如実に映しているかに見える。

現代の大学生にとっての「アジア」イメージを見てくると、新聞の調査と同様に「経済的遅れ」、「政治的不安定さ」、また「言われなき偏見」などが、回答の多くを占めている事は否定できない。しかし、「ビジネスチャンスとして残された最後の地」のような極めて打算的な理解も含め、その「発展」「躍進」「活力」に期待する声は相当潜在している事がわかる。さらには、西洋近代的世界観が行き詰まりを見せる中、「非西洋的価値観」を「アジア」の中から積極的に発見しようとする傾向も多く見られる。それがオリエンタリズム批判につながる再認識作業への自覚的な営為につながるとすれば、若者にとって、それは非常に大切な過程であろう。そのきっかけは、例えばベトナム旅行で買い求めた可愛い籐製民芸品への愛着から始まるかもしれないのである。

とは言うものの、筆者が一方で大学生の「アジア」イメージに不安を抱いていることもまた告白せざるを得ない。03年には「黄色人種」という「同種」に恃むかの回答が増加しているが、現代史を振り返れば1940年代にも同様な風潮が生れ、それは「大東亜共栄圏」構想と表裏の関係にあったという厳然たる事実がある。「戦争」イメージが急速に失われつつある事、自分の頭で思考するのを極力避けようとするかの回答が少なからず看取できた事、なども悪い想像を惹起してしまう。また、（先の肯定的評価とは逆になるが）「東南アジア」ブームも旅行業者などが引いたレールに乗るだけの一時的流行として、蕩尽され消費されていく事への懸念もない訳ではない。また権力的優越意識を内包したオリエンタリズムを無自覚に体現する事への危惧もある。さらに我々の自己認識（「日本」イメージ）との関係性も問われてこよう[8]

ともあれ、ここは若者の旧弊に囚われない発想力が、新しいアジア観を創出していく

事に期待を寄せたい。

以下は、01年度の受講生が「アンケート」の自由記述欄にそれぞれ書き残した文章である。

- 「僕たち日本人から生きていくためにお金を稼ごうとすりよってくる人。」
- 「現在は中東・インドネシアから原油を依存しているし、その他の資源なり食料なりを依存しているわけであり、経済的に優れているのは、アジアの国々なしではありえないことであるので、アジアではない、と言ったら欧米の人間に逆に馬鹿にされるぞ。」
- 「千葉大学の構内を歩いていると、外国人の方とすれ違う事がある。彼等の母国はどのような国なのか、とてもとても興味があり、いろいろ想像してしまう。日本がアジアの他国にどんなことをしたかは、なんとなく知っているが、どうして韓国の人たちが日本に対する対抗意識をあそこまで燃やすのか、少し理解しがたいことがある。」

国際認識や歴史観、さらには想像力を自ら鍛えていく事ができるような素材を日本人学生（そして留学生にも）に積極的に与えて行く事、そしてキャンパスに多く存在するアジア留学生と日本人学生が接する機会を積極的に創出し、無知から生ずる偏見を少しづつでも減ずるとともに、信頼関係を構築できる端緒作りをする事などが、筆者のささやかながらも重要な役割となっていくであろう。

本稿は、論説としては不十分な面が多々あるが、学問的研鑽を深めていく一里塚のレポートとして位置付けている。忌憚なきご意見を賜りたく思う。

(1) 例えば、筆者を含めた５名の教員が共同で行っている「隣人を知る」は、留学生と日本人学生がグループを作って、在住外国人のための日本語教室を見学に行く、都市開発と文化保全の問題を討論するなど、主体的な取り組みを通じた相互理解を目指そうとしている（内海由美子・吉野文・和田健・見城「他者を通して自分を知る試み----国際交流科目『隣人を知る』の実践とその課題」『千葉大学留学生センター紀要』第９号、2003年）。

(2) 十数名の講師（学内が３分の２、学外非常勤が３分の１を担当）が、１ないし２回担当するオムニバスで行われる。時代は、江戸時代から「大東亜共栄圏」までの近代史全般をカバーし、対象地域も中国・朝鮮などの東アジアを中心に、東南アジア、

西アジアなどを専門とする教員がそれぞれの視点から、アジア観形成の特質を要領よく論ずる。

(3) 03の学年別回答者数は、1年生45名（33.1%）、2年生35名（25.8%）、3年生45名（33.1%）、4年生以上7名（5.1%）、未記入4名（2.9%）に分かれた。なお、両者のデータの性格には数値以上に大きな相違がある。01に関しては、受講人員予定枠（200名）を大きく上回ったため、急遽アンケート用紙に名前・学籍番号を記入させ、セレクションの材料にしたことである（「講義に期待するところ、学ぼうとするところ」などの記述を、選抜材料とした）。この事は学生にも伝えたため、03（希望者全員の受講を前提とし、完全無記名であった）と比して回答に臨む姿勢が異なっていた可能性はありうる。なお、本来のアンケート項目には性別を尋ねる項目はなく、必然的に03の男女別比率は算出できていない。

(4) 村井吉敬等編著『アジアと私たち－若者のアジア認識』三一書房、1988年、32頁。

(5)『朝日新聞』1994年8月23日付け。

(6)『朝日新聞』1996年11月9日付け。

(7)『朝日新聞』1999年10月24日付け。

(8) 見城「『日本』というイメージ」『千葉大学留学生センター紀要』第5号（1999年）は、千葉大学生に対するアンケート分析をもとにした小論で、日本人学生の「日本」イメージ＝自己認識をアジア諸国の「日本」イメージと重ね、その親和と乖離を明らかにしようとした。よって、本稿と表裏を為すものである。

【資料１】現代大学生のアジアイメージ（左＝2001年　回答総数334名：右＝2003年　回答総数136名）

① 地域名・国名	135(40.4%)：35(25.7%)
東洋	4:5
東アジア	12:0
中国	44(13.2%):9(5.9%)
上海	0:1
台湾	2:0
韓国・朝鮮	13:3
モンゴル	0:1
日本	4:1
東南アジア	25(7.5%):7(5.0%)
タイ	5:3
フィリピン	3:0
ベトナム	3:2
ミャンマー	1:1
インドネシア	1:2
インド	12:2
西アジア	2:0
中東	1:0
自分の位置する地域	0:1
②民族的・身体的特徴	**57(17.1%):50(36.8%)**
黄色人種・モンゴロイド	37(11.1%):27(19.9%)
黒い髪・黒い瞳	7:11
多民族	10:1
少数民族	1:0
東洋民族	0:1
同民族	2:1
同じ顔	0:2
背が低い	0:2
眼が細い	0:1
こんがり焼けた肌	0:1
フィジカルが弱い	0:1
恥かしがり屋の民族	0:1
集団で居る	0:1
③風土・産物など	**75(22.9%):88(64.7%)**
広大	13(3.9%):16(11.8%)
ユーラシア大陸	4:2
大陸の東側の地域	0:1
熱帯・亜熱帯・暑い・赤い	9:13
砂漠	1:2
土ほこり・泥くさい	1:2
遊牧民	1:0
モンスーン	2:0
湿潤・ジメジメ	1:3
温帯	0:1
ジャングル	0:3
島が多い	0:3
水・海	0:2
ガンジス川	0:1
スコール	0:1
米・穀物	14:11
茶・茶色	1:5
農業・農耕民族	5:1
美味しく豊かな料理	14:6
スパイシー	0:2
フルーツ	0:1
虎	2:0
象	0:3
パンダ	0:1
長くて角とヒゲのある龍	0:1
竹	2:2
アジア民芸品・籐の籠	0:3
香	0:1
豊富な天然資源	4:1
自然災害	1:0
④歴史・文化・宗教	**70(21.0%):21(15.4%)**
伝統・歴史性	28(8.4%):3(2.2%)
古代文明（黄河・インダス）	3:4
東洋文化	0:1
歴史的建造物・遺跡	0:2
シルクロード	1:1
漢字	2:2

タガログ語	1:0
多言語	2:0
宗教	5:0
仏教	13(3.9%):3(2.2%)
イスラム教	11:1
ヒンディー教	3:0
儒教	1:0
中華思想・中国中心	0:2
芸術	0:1
⑤非西洋的価値観	**83(24.9%):29(21.3%)**
多元性・多様性	25(7.5%):4(2.9%)
神秘・精神性	18(5.4%):3(2.2%)
エスニック・独特な民族衣装、楽器、踊り	11:6
独特な世界・文化を形成	2:6
乱雑・混沌（カオス）	11:2
未知・不思議・奇異	5:1
自然を大切にする	5:0
東洋的価値観・西洋と対称	2:1
無常	0:1
誇り	2:0
新しい価値観の発信地	1:0
時間がゆっくり流れる	1:0
流麗な美	0:2
おだやか	0:1
⑥現実的政治・国際関係	**75(22.5%):27(19.9%)**
人が多い・人口爆発	42(12.6%):15(11.0%)
民族紛争・内戦・難民	14:2
政治的不安定	4:0
中台問題	1:0
怯えた眼を持つ子どもたち	1:0
社会主義・共産主義	2:0
専制政治	1:0
AA 会議	1:0
核保有国	1:0
マクロな枠組み・つながり	2:0
隣国との関わりが希薄	1:0
世界における立場が低い	1:1
ASEAN	4:4
新興地域が多い	0:1
北朝鮮問題・拉致	0:2
SARS	0:2
⑦植民地・戦争	**78(23.4%):21(15.4%)**
日本の侵略、戦後処理	33(9.9%):3(2.2%)
被抑圧国・植民地	29(8.9%):14(10.3%)
大東亜共栄圏	8:3
太平洋戦争・「大東亜戦争」	7:0
従軍慰安婦	1:0
⑧経済的退歩	**153(45.8%):48(35.3%)**
発展途上国・経済的遅れ	98(29.3%):33(24.3%)
貧困・経済的格差大	50(15.0%):9(6.5%)
物価が安い	4:6
経済的停滞	1:0
⑨経済的発展	**134(40.1%):18(13.2%)**
進歩発展めざましい	62(18.6%):7(5.1%)
21世紀の世界で重要な位置を占める	20(6.0%):3(2.2%)
今後の発展に期待できる	17:4
活力・熱気・バイタリティー	15:0
マレーシアなどの高層ビル	2:0
NIES	13:2
APEC	3:0
経済統合	1:0
IT 革命	1:0
工業化	0:1
欧米に追いつこうとしている	0:1
⑩日本との経済的関係性	**11(3.3%):1(0.7%)**
日本企業進出・低賃金・下請け	8:0
ビジネスチャンスとして残された最後の地	1:0
日本が経済援助しないとダメ	1:0

日本を市場としている国々	1:0
ともに成長すべき地域	0:1
⑪日本との政治的社会的関係性	**10(3.0%):1(0.7%)**
日本と仲が悪い・反日	2:1
アジアの一員としてアジアをリードしている日本	1:0
日本をモデルとしている	1:0
教科書問題	3:0
石原慎太郎	1:0
「第三国人」	1:0
名誉白人	1:0
⑫日本との文化的歴史的関係性	**6(1.8%):2(1.5%)**
日本文化発祥の地	3:0
日本民族のルーツ	1:2
文化的同質性	2:0
⑬親近感	**26(7.8%):11(7.6%)**
日本との深い関係性	8:0
日本との共通性	1:0
日本のアジアブーム	6:0
日本のサブカルチャー受容	2:0
サッカー（アジア杯・弱い）	3:3
スポーツのライバル	0:1
旅行に行きたい地域・観光地	2:2
ネオン街	0:1
ロマン	0:1
庶民的・人が良い・笑顔	2:1
家族のつながり重視	2:0
身近	1:1
私の祖国	0:1

⑭距離感・偏見	**35(10.5%):19(14.0%)**
差別される、見下される	7:3
近くて遠い	4:1
閉鎖的・日本が溶け込めない	1:2
治安が悪い・麻薬・犯罪	4:2
海賊版が多い	0:1
環境問題	4:0
不潔・汚い・臭い	4:0
脱亜入欧、欧米に遅れ	3:1
劣等感	2:0
ネガティブ	1:0
暗い・かっこ悪い・地味	1:2
古臭い	0:1
乞食・飢餓	1:1
弱小・マイナー	1:2
原始的・文明未発達	1:1
疎外感・危機感	1:0
複雑	0:1
今いちプラスイメージが出てこない	0:1
⑮人名など	**11(3.3%):2(1.5%)**
岡倉天心	2:0
タゴール	1:0
ガンジー	1:0
毛沢東	1:0
ホメイニ	1:0
アロヨ大統領	1:0
沢田教一（戦場カメラマン）	1:0
一ノ瀬泰造（戦場カメラマン）	1:0
竹内好「日本とアジア」	1:0
サイード「オリエンタリズム」	1:0
パフィー	0:1
金正日	0:1

【資料２】日本は「アジア」だと思いますか？

◎はい　268(80.2%):121(88.9%)

【その理由】

歴史的文化的理由	135(40.4%):42(30.9%)
地域的地理的理由	103(30.8%):53(40.0%)
身体的理由	63(18.9%):23(16.9%)
アジアだと思うが、欧米に近い	48(14.4%):6(6.6%)
経済的などの結びつきが深いため	23(6.9%):3(2.2%)
精神・思想面	4:0
欧米ではないから・消去法	4:3
授業でそうならったから。そういう区分だから。	3:6
戦争や植民地占領の過去から	4:0
「アジア」でありたいから	1:0
自由観念の発達の遅れ	1:0
政治的立場の弱さ	1:0
「アジア大会」に出るから	0:7
欧米に行くと「中国人だ」と言われるから	0:1
分からないがそう信じてきた	0:1
特に反対する理由がないから	0:1
「アジア」という枠組なしで日本の現状を語る事はもはやできないから	0:1

◎いいえ　58(17.4%):14(10.3%)

【その理由】

欧米化している	22(6.6%):6(4.4%)
経済格差が大きい	13:0
アメリカとの連携の方を重視している	8:2
日本は単独の独立した存在としてある	4:0
戦後処理の不徹底などの不信感から	4:0
アジアの人々の意識では日本はアジアとして認められていないと思う	2:1
明治時代から脱亜しようと考えていたから	1:0
日本だけ浮いている	1:0
分類できないから	0:1
アジアに入る事に抵抗を持つ人がいる	1:0
文化レベルの違い	1:0
陸続きでないため、文化交流が密でない	2:2
日本は韓国・中国とは違う	1:0
大陸と明らかに顔の系統がちがう	0:1
日本にはもはや躍動感がない	1:0
あまり組織に入っていない	0:1

◎どちらとも言えない　6(1.8%):2(1.5%)

両面を備えている	2:2
日本の中でも、非アジア的都会とアジア的田舎が混在している	2:0
独自性が強い	1:0
様々な国の影響を受けている	1:0